

単純接触効果の知覚的流暢性誤帰属理論における 誤帰属過程の再検討

目白大学人間学部心理カウンセリング学科非常勤講師 生駒 忍

【要 約】

単に見たり聞いたりすることによりその対象への好意度や印象が向上するという単純接触効果の有力な説明に、知覚的流暢性誤帰属理論がある。本稿では、この理論に対して、誤帰属の過程に関する部分を中心に、批判的検討を行う。特に、閾下単純接触効果の大きさ、および先行提示への気づきの影響の2点を取り上げる。その上で、知覚的流暢性誤帰属理論における誤帰属の位置づけについて、今後の検討課題を考察する。

キーワード：単純接触効果，知覚的流暢性，潜在記憶，帰属，無意識的過程

はじめに

ある対象に対して、見たり聞いたりといった接触経験を持つことで、それに対して受ける印象や好意度が向上する。心理学において単純接触効果 (mere exposure effect) と呼ばれているこのような現象は、起源をどこに定めるかについては意見が分かれるものの (生駒, 2005), 古くから関心を集め、今日までに数多くの研究が積み上げられ続けている。

その生起メカニズムは、単純接触効果の研究史の中でも主要な研究テーマとして位置づけられ、さまざまな仮説が唱えられてきた (三井, 1979参照)。その中でも、認知心理学的な考え方に基づいた知覚的流暢性誤帰属説が、支持を広く集めることとなり、今日に至っている (生駒・太田, 2008; Moreland & Topolinski, 2010)。これは、接触経験のある対象はそうでないものに比べて、再度の知覚時により流暢に処理され、そしてこの流暢性が正しく先行経験に帰属されるのではなく、誤って対象の評価的側面に帰属されることで、印象や好意度がポジティブな方向に変化するという考え方である。

もちろん、この知覚的流暢性誤帰属理論といえども、それ単独で古今のあらゆる知見を統一的に説明できるわけではない。しかし、これに

取って代わるほどのより広汎で強い説明力を持つ仮説はこれまで見いだされておらず、その限りにおいては最も優れている。

とはいえ、この理論の提唱者や支持者の誤りないしは不注意に起因すると思われる要因が、議論に混乱を招いている部分もある。理論のうち、知覚的流暢性の関与については、争われることはあまりない。一方、誤帰属の過程の仮定については、仮説が提唱された時期に前後して進展のあった潜在記憶研究の成果との関連が不明瞭であるなど、議論を呼びやすい面がある。また、知覚的流暢性誤帰属理論の根拠となった実証研究においては、理論と整合させることを意識して分析や解釈を進めたように思われる部分もある。

そこで本稿では、単純接触効果の知覚的流暢性誤帰属理論に関して、特に誤帰属の過程に焦点を当てての批判的考察を行う。まず、知覚的流暢性誤帰属理論を巡る議論でたびたび関心を向けられてきた二つの論点、すなわち閾下提示でより大きな効果が得られるのか否か、および先行提示への気づきが単純接触効果を抑えるのか否かについて取り上げ、この理論の論拠とされてきた知見およびそれに基づく主張に再検討を加える。その上で、近年の知見を整理しつつ、

この理論の今後のあり方について論考を行う。

閾下提示のほうが大きな効果が得られるか

Bornstein (1989) によるメタ分析は、単純接触効果に関心を向ける研究者層が、Zajonc (1968) 以来の実験社会心理学から認知心理学へと移るまでの時期の研究知見を整理統合したものであるといえる。一方で、単なる過去の総括にとどまらず、認知心理学に重点が移ってからの研究課題を提供することにも寄与した。その一つが、Kunst-Wilson & Zajonc (1980) に始まる閾下単純接触効果について取り上げ、閾上提示よりも閾下提示のほうが、大きな単純接触効果を生ずることを示唆したことである。閾下提示での効果量は $r = .528$ であったと述べられており、この値はBornstein (1989) が算出した他のいかなる提示時間でのものと比べても高く、後にBornstein (2002) において示されている十分に再認可能な場合の効果量 $r = .121$ を大きく上回る。また、Cohen (1988, 1992) の基準に照らせば、絶対的にも大きな効果量であるといえる。

これを受けて、Bornstein & D'Agostino (1992) は、顔写真および無意味図形を閾下(提示時間5ms)または閾上(500ms)で提示しそれらへの単純接触効果を検討し、閾下提示のほうがより強い単純接触効果を生じるという結果を得た。これは、知覚的流暢性誤帰属理論を生み出す重要な根拠となった。判断時にその刺激が既提示であることに気づき、知覚的流暢性が先行経験へと正しく帰属できることは誤帰属と排反するので、そのような気づきが起こり得ない閾下提示のほうが単純接触効果が起こりやすいと考えられるからである。

この実験結果は興味深いものではあるが、しかし、その再現性は高くない。そもそも、Bornstein & D'Agostino (1992) が引用している先行研究においてすでに、その結果と一致しない知見が得られている。Seamon, Marsh, & Brody (1984) は、再認がチャンスレベルを上回る提示時間12ms以上の条件においても、再認不可能な場合と同様か、それ以上の単純接触効果を一貫して得ている。また、Bornstein, Leone, & Galley (1987, Exp. 2) では、閾下提

示のほうが単純接触効果が小さいと述べられている。これらからはむしろ、Bornstein & D'Agostino (1992) が先行研究の再現に失敗しているという解釈も成立する。

閾上より効果が大きいかどうかという議論以前に、閾下単純接触効果自体が頑健な現象ではない。坂元・大須・坂元 (1999) では、写真刺激では閾上でのみ効果があり、絵刺激では閾上・閾下とも何ら効果が得られていない。佐藤・青木・宮原 (1998) でも、3種類の刺激条件全てにおいて、閾下・閾上とも全く認められていない。坂元 (1996) は、閾下・閾上ともに接触によって好ましがむしろ下がる傾向を報告している。川上・都留・吉田 (2012) は、顔写真の絶対的な好意度評定(実験1)および対提示による相対的な好意度評定(実験2)との双方において、閾上でのみ効果を得ている。提示時間を操作し再認と単純接触効果とを検討したFox & Burns (1993) では、5ms条件では再認も単純接触効果もチャンスレベルと比較して有意ではなく、6msでは再認のみが有意、7msでは両者とも有意という結果を得ており、閾上提示に対してのみ(再認が可能であるなら閾下提示ではなかったはずと考えるのが、一般的な理解である。ただし、瞬間提示刺激の記憶高進現象(Erdelyi, 1996, 2006参照)においては、知覚時に意識化困難であった刺激が後のセッションで意識化されることがある。)単純接触効果が生じている。Merikle & Reingold (1991, 1992) は、閾下単純接触効果が再現された研究はVanderplus & Garvin (1959) のランダム多角形を用いたものに偏っていることを指摘しており、よって、効果の生じやすい刺激材料の範囲が限局された、一般性の低い現象である可能性も考えられる。しかし、Vanderplus & Garvin (1959) に準じた多角形を用いた丸山 (2006) は、閾下では単純接触効果を得ることができておらず、その再現性にも疑問がある。Mandler, Nakamura, & Van Zandt (1987) にも、ランダム多角形を用い初めて閾下単純接触効果を示したKunst-Wilson & Zajonc (1980) の再現に失敗した未公開研究への言及がある。

Bornstein (1989) のメタ分析で得られた、閾下提示のほうがより強い単純接触効果が得られ

るという結果も、実際にはアーティファクトに過ぎない、ないしは効果量の過大視に起因している可能性がある。その理由は、一つは公開バイアスの問題である。閾下で提示したはずが効果を得られなかった場合には、機器の問題等による失敗と理解されて公刊に至らず、メタ分析の対象に入る機会を失っているのかも知れない。もう一つは、分析対象の偏りである。メタ分析の対象となった閾下単純接触効果の研究のうち、Bornstein et al. (1987, Exp. 2)を除く全てが、各刺激の提示回数は5回ずつ、提示順はランダム、刺激は絵ではなく無意味図形、実験参加者は成人という実験条件での検討であり、これらの条件はいずれも、単純接触効果が強く得られることがこのメタ分析の論文自体の中でも示されているものである(生駒・太田, 2008)。よって、閾下提示条件のメタ分析対象データは、単純接触効果が強く得られる条件のそろったもので成り立っており、そうではない条件での実験データを広く含む閾上条件と比較して効果量が高い値を示すことは、この偏りのみでも説明が可能である。なお、Bornstein (1989)は、この閾下単純接触効果のメタ分析については、他の分析とは異なり、結果を表にまとめることはせずに本文中で述べるのみとしている。そのため、メタ分析の信頼性を反映する指標であるフェイル・セーフ数が、この分析については記載されていない。

以上のようなことを考えれば、閾下提示のほうが単純接触効果が大きいという主張は、十分な実証的支持を得ているとはいえない。

「気づき」は単純接触効果を抑えるか

知覚的流暢性誤帰属理論によれば、流暢性が先行経験へと正しく帰属される、つまり過去に提示されたことに気づくことは、誤帰属が起こる機会を失わせるので単純接触効果を消失させる。このことを直接に検討した研究として広く知られているのが、Bornstein & D'Agostino (1994)である。この論文は、気づきを教示によって操作し、閾下 (Exp. 1) および閾上 (Exp. 2) での提示による単純接触効果を検討したものである。その結果、評定対象である刺激が先ほど見たものであると教示された群 (old群) で

は、どの刺激も見たことがないものであると教示された群 (new群) や見たことの有無に関する情報を与えられない群 (standard群) よりも低い好意度評定値が得られた。これは教示による気づきの操作により、知覚的流暢性が好意度へではなく事前に見たことがあることへと帰属されたためとされ、よって知覚的流暢性誤帰属説が支持されたという結論が導かれている。しかし、少なくとも実験手続きおよび統計処理において、いくつかの問題がある。

Exp. 1では、前述の3群の他にベースラインとしての統制群を別に設定しており(坂元(1999)の紹介では省かれている。)、old群で既提示刺激がベースラインと同様の評定値を得ていることを、単純接触効果が気づきの操作により割り引かれたことの証拠としている。old群では閾下提示に由来する知覚的流暢性がその先行提示へと帰属されるために好意度への誤帰属が起こらず、よってベースラインと同様の評定値になるという考え方である。

しかし、この統制群の設定は、ベースラインとして適正であるとはいえない。他の3群には共通して課されている先行提示のセッションが統制群にはなく、評定課題のみを行わせているが、刺激の先行提示による疲労ないしは飽和が後続する課題における評定に影響しうること(生駒, 2002, 2007)を考えれば、統制に問題がある。統制群においては、実験で用いられているものと同様ではあるが同一ではないような刺激を提示する段階を他群と同様に経た上で、評定を行うべきであったはずである。よって、このような不適切な「ベースライン」をベースとしての比較は、妥当なものであるとはいえない。

とはいえ、仮にその統制群を検討対象から除外したとしても、単純接触効果を検討することはなお可能である。これ以外の3群それぞれにおいて、参加者内要因である刺激の提示の有無の両方の評定値が得られていることから、単純接触効果は各群における提示の有無による差として観測することができる。Bornstein & D'Agostino (1994)は、この差が単純接触効果であることを認識しており (p.122)、統制群を除く3群×提示の有無の2要因混合計画による分

分散分析は、統制群との比較よりも先に報告されている。もし、教示の操作によって単純接触効果が割り引かれるのであれば、割り引かれた条件では提示の有無の間の差が他群よりも縮小するため、この分散分析では交互作用が認められるはずである。しかし、いずれの主効果も有意であった一方で、交互作用についての記述はない。したがって、old群において単純接触効果が割り引かれたと結論できるような証拠は示されていない。

Exp. 2では、闕上提示においてExp. 1と同様の教示の操作を加えての検討を行っている。知覚的流暢性誤帰属説から導き出された仮説は、評定課題での刺激が既提示のものかどうかの教示を受けないstandard群では、闕上提示であるために生じる刺激への気づきによって単純接触効果が割り引かれるが、未提示であると教示されるnew群ではその影響が抑えられるためにより大きな単純接触効果が現れ、よってnew群とstandard群とで効果の大きさが異なることによる交互作用が認められる、というものであった。しかし分析では、そこに分析範囲を絞ることはせず、教示の3条件と刺激の提示の有無とを要因とした3×2の分散分析での交互作用が報告されている。グラフの傾きから読み取る限りでは、単純接触効果はnew群で最も大きく、standard群がそれに続き、old群で最も小さいという結果である。すると、この交互作用は、主にnew群とold群との間での効果の相違に起因している可能性が高く、仮説が想定していたnew群とstandard群との交互作用があることまで示すものではない。その代わりとしてか、分散分析の後で単純主効果の検定を行い、これが既提示刺激では有意であるが未提示刺激では有意ではないという結果を得た上で、既提示刺激のnew群とstandard群との間の差があることを t 検定で示すという手法が取られている。しかし、既提示刺激で単純主効果が有意であったのは、先の交互作用の主因と思われるold群における評定値の低さによるところが大きいであろう。検定力の検証をせずに、未提示刺激のほうで有意ではないことをもって既提示・未提示間でパターンが異なると結論づけるのは妥当でない。また、3水準が設定されていて多重比

較で検討すべき箇所に t 検定を用いれば、第一種の錯誤が起こる危険性が不当に高くなり、よってこの恣意的な検定での有意差は信頼できるものではない。その上、既提示刺激のnew群とstandard群との間の差は、有意であると述べてはいるものの、“ $t(38) = 1.97, p < .06$ ” (p.121) とあることから、一般的な基準では有意とは認められない程度のものでしかない。したがって、Exp. 2の結果からは、new群において単純接触効果の割り増しが認められたと結論できるような証拠は得られていない。

以上から、単純接触効果は過去に提示されたことに気づくかどうかに影響されるとはいえない。むしろ、これまでの数多くの知見が示してきているように(生駒, 2005参照)、単純接触効果は顕在記憶とは独立に起こると考えるほうが妥当である。

なお、近年でもなお、単純接触効果に顕在記憶の関与を考えようとする立場を目にすることがある。例えば、富田・森川(2011)は高次認知処理による影響や、顕在記憶課題成績との正の相関を得た研究に言及し、“単純接触効果は顕在記憶の影響もうけていると考えることも可能”(p.369)と論じている。しかし、高次認知処理の関与の例としてそのレビュー中で挙げられた研究のうち、八木・菊地(2009)は単純接触効果に指示忘却教示の効果が及ぶと主張しているが、先だって指示忘却手続きの妥当性を確認するはずの実験1が、忘却効果があれば得られるはずの交互作用を検出できず、恣意的な片側仮説の t 検定に依拠する形をとっており、そもそも適用した操作が妥当でない可能性がある。単純接触効果に学習時の処理水準(Craik & Lockhart, 1972)の操作が影響するという布井・吉川(2008)も挙げられているが、提示刺激に対する深い認知処理を要求する実験が「単純」接触効果の範疇に入るかどうかはともかくとしても、処理水準効果は一般的な潜在記憶課題でも認められうる(例えば、Horton, Wilson, & Evans, 2001; 北出, 2005)ことから、単純接触効果に顕在記憶が関与することを立証するものではない。また、正の相関が得られた研究があるからといって、因果関係を認めるのは早計である。富田・森川(2011)が提示したNewell

& Shanks (2007) で $r = .20$ という弱い正の相関が報告された他には, Matthes, Schemer, & Wirth (2007) で認められた単純接触効果に関して $r = .15$ というそれと近い値が得られているものの, これは有意ではない。一方, 生駒 (2005) が列挙しているように, ほぼ無相関であるという知見を得た研究は数多く, 前述の八木・菊地 (2009) もそうである。また, Bornstein & D'Agostino (1992) では, $r = -.23$ (Exp. 1) および $r = -.26$ (Exp. 2) という, 弱い負の相関が得られている。このように, 無相関を中心に, 正の相関, 負の相関とも報告されていることは, 両変数間に安定した因果関係がある可能性には否定的な結果である。双方に影響する要因が偶発的に含まれた実験設定では間に正または負の偽相関が観察されるものの, 本質的には独立であると理解するのが自然であろう。

今後の展望

単純接触効果の知覚的流暢性誤帰属理論は, 以前に接触経験があることでその刺激の知覚的流暢性が高まっていると, それが接触経験自体ではなく刺激の評価へと誤って帰属され, その結果として接触経験の多い刺激ほどより好意度や印象において高く評価されるというものである。このうち, 知覚的流暢性の関与については, 大きな争いはない。単純接触効果の理解への知覚的流暢性の概念の導入は, Bornstein & D'Agostino (1992, 1994) による理論の提唱よりも先に, Mandler et al. (1987) などによって着想されている。また, 接触反復によるもの以外であっても, 処理の流暢性の向上が好意度の向上と結びつくことが広く知られている (Reber, Schwarz, & Winkielman, 2004)。生理指標からも, 瞳孔反応 (Yoshimoto, Imai, & Takeuchi, 2012) や大頰骨筋活動 (Harmon-Jones & Allen, 2001) といった形で, 反復接触による快感情の高まりが確認されている。

議論があるのは, 誤帰属の過程の仮定である。本稿で示してきたように, 閾下提示や気づきの操作によってこの仮定の検証が図られてきたものの, この点に関しては十分な実証的支持が得られているとはいえない。では, 知覚的流

暢性誤帰属理論における誤帰属の位置づけはどのようにあるべきであろうか。生駒・太田 (2008) が新しい視点として挙げている二つの考え方が, 今後の発展に向けて有用であるかも知れない。一つは, 流暢性自体が快であると考ええるヘドニック流暢性モデル (Fang, Sing, & Ahluwalia, 2007; Winkielman & Cacioppo, 2001) である。このモデルは, 反復提示と快との間には帰属過程を置かないため, この帰属の部分に直接的, 間接的に関与すると考えられた実験変数を巡る, 本稿で論じてきたような問題には左右されない。

そしてもう一つは, 潜在記憶研究から導き出された, 単純接触効果を顕在記憶と排反しない記憶誤帰属 (原田, 1999; 生駒, 2005) の一種に位置づける考え方である。この場合は, ヘドニック流暢性モデルとは異なり, 帰属が快を生むという従来の知覚的流暢性誤帰属説の立場を保つが, 刺激提示の閾下・閾上の操作や既提示性の教示といった顕在記憶に関与する変数からは本質的な影響を受けないことの説明が可能となる。帰属過程の心理学的測定では, 並べられた帰属先の選択肢の中からの択一方式 (例えば, 伊藤, 1996; 佐藤・菅原, 2011) がしばしば用いられ, あるいは実験者が指定した件数分の強制選択 (上村・新井田・中村, 2011), 選択肢間での合計が等しくなるように帰属の相対量を配分させる手法 (Kessler, Lloyd, & Lewis, 1999) なども見られるが, これらは帰属が相互に排反する性質を持ち, どこかに帰属を行うと他には帰属されなくなるという考え方を前提としている。しかし, 少なくとも知覚的流暢性の帰属に関しては, これは以前に見たからだという顕在記憶への正しい帰属が対象の評価への誤帰属の可能性を失わせたり, 顕在記憶への帰属が妨げられるほどその分が誤帰属へ回ったりするような, 知覚的流暢性誤帰属理論が前提としていたような排反性を持たないと考えることで, より整合性のある解釈が可能となる。それぞれが独立してはたらいっているなら, 確実に見た覚えがあるという想起意識と, 好印象を受けるといふ単純接触効果とが同時に起こる事態も, Fox & Burns (1993) の一部条件で得られたようなどちらも得られないという事態も, 矛

盾なく説明できる。

あるいは、相互排反性のない帰属というやや反直観的な想定を回避するために、帰属という概念を用いない理解をしたほうが、より自然な解釈やモデル化の手がかりを得やすいとも考えられる。例えば、Green, Bærentsen, Stødkilde-Jørgensen, Roepstorff, & Vuust (2012) が単純接触効果を知覚的流暢性による期待で説明することを提案しており、この考え方を発展させることは有用であるかも知れない。

【文献】

- Bornstein, R. F. (1989). Exposure and affect: Overview and meta-analysis of research, 1968–1987. *Psychological Bulletin*, **106**, 265–289.
- Bornstein, R. F. (2002). Consciousness organizes more than itself: Findings from subliminal mere exposure research. *Behavioral and Brain Sciences*, **25**, 332–333.
- Bornstein, R. F. & D'Agostino, P. R. (1992). Stimulus recognition and the mere exposure effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 545–552.
- Bornstein, R. F. & D'Agostino, P. R. (1994). The attribution and discounting of perceptual fluency: Preliminary tests of a perceptual fluency/attributional model of the mere exposure effect. *Social Cognition*, **12**, 103–128.
- Bornstein, R. F., Leone, D. R., & Galley, D. J. (1987). The generalizability of subliminal mere exposure effects: Influence of stimuli perceived without awareness on social behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1070–1079.
- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Cohen, J. (1992). A power primer. *Psychological Bulletin*, **112**, 155–159.
- Craik, F. I. M. & Lockhart, R. S. (1972). Levels of processing: A framework for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **11**, 671–684.
- Erdelyi, M. H. (1996). *The recovery of unconscious memories: Hypermnnesia and reminiscence*. Chicago: University of Chicago Press.
- Erdelyi, M. H. (2006). The unified theory of repression. *Behavioral Brain Sciences*, **29**, 499–551.
- Fang, X., Singh, S., & Ahluwalia, R. (2007). An examination of different explanations for the mere exposure effect. *Journal of Consumer Research*, **34**, 97–103.
- Fox, S. E. & Burns, D. J. (1993). The mere exposure effect for stimuli presented below recognition threshold: A failure to replicate. *Perceptual and Motor Skills*, **76**, 391–396.
- Green, A. C., Bærentsen, K. B., Stødkilde-Jørgensen, H., Roepstorff, A., Vuust, P. (2012). Listen, learn, like! Dorsolateral prefrontal cortex involved in the mere exposure effect in music. *Neurology Research International*, Article ID 846270.
- 原田悦子 (1999). 潜在記憶と記憶の誤帰属 心理学評論, **42**, 156–171.
- Harmon-Jones, E. & Allen, J. J. B. (2001). The role of affect in the mere exposure effect: Evidence from psychophysiological and individual differences approaches. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 889–898.
- 生駒 忍 (2002). メロディの潜在記憶—単純接触効果による検討— 日本基礎心理学会第21回大会プログラム, 44.
- 生駒 忍 (2005). 潜在記憶現象としての単純接触効果 認知心理学研究, **3**, 113–131.
- 生駒 忍 (2007). 一度の聴取によって生じるメロディの単純接触効果 音楽心理学音楽療法研究年報, **36**, 10–15.
- 生駒 忍・太田信夫 (2008). 知覚的流暢性誤帰属説 宮本聡介・太田信夫 (編) 単純接触効果研究の最前線 北大路書房 pp.26–36.
- 伊藤崇達 (1996). 学業達成場面における自己効力感, 原因帰属, 学習方略の関係 教育心理学研究, **44**, 340–349.
- Horton, K. D., Wilson, D. E., & Evans, M. (2001). Measuring automatic retrieval. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **27**, 958–966.
- 川上直秋・都留 寛・吉田富二雄 (2012). 単純接触効果における意識と無意識—閾上提示と閾下提示との効果比較(1)— 日本社会心理学会第53回大会発表論文集, 113.
- Kessler, D., Lloyd, K., & Lewis, G. (1999). Cross sectional study of symptom attribution and

- recognition of depression and anxiety in primary care. *BMJ*, **318**, 436-440.
- 北出理央 (2005). 潜在記憶における自己関連付け効果の検討 行動基礎論履修コース2004年度卒業論文概要 (新潟大学), 8.
- Kunst-Wilson, W. R. & Zajonc, R. B. (1980). Affective discrimination of stimuli that cannot be recognized. *Science*, **207**, 557-558.
- Mandler, G., Nakamura, Y., & Van Zandt, B. J. (1987). Nonspecific effects of exposure on stimuli that cannot be recognized. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **13**, 646-648.
- 丸山佑輝 (2006). 閾下・閾下知覚における単純接触効果の検討 行動基礎論履修コース2005年度卒業論文概要 (新潟大学), 21.
- Matthes, J., Schemer, C., & Wirth, W. (2007). More than meets the eye: Investigating the hidden impact of brand placements in television magazines. *International Journal of Advertising*, **26**, 477-503.
- Merikle, P. M. & Reingold, E. M. (1991). Comparing direct (explicit) and indirect (implicit) measures to study unconscious memory. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **17**, 224-233.
- Merikle, P. M. & Reingold, E. M. (1992). Measuring unconscious perceptual processes. R. F. Bornstein & T. S. Pittman (Eds.), *Perception without awareness: Cognitive, clinical, and social perspectives* (pp.55-80). New York: Guilford Press.
- 三井宏隆 (1979). Mere exposure effect 研究の展望 実験社会心理学研究, **19**, 165-174.
- Moreland, R. L. & Topolinski, S. (2010). The mere exposure phenomenon: A lingering melody by Robert Zajonc. *Emotion Review*, **2**, 329-339.
- 布井雅人・吉川左紀子 (2008). 好みの形成に処理水準が及ぼす影響 映像情報メディア学会技術報告, **32** (48), 63-67.
- Reber, R., Schwarz, N., & Winkielman, P. (2004). Processing fluency and aesthetic pleasure: Is beauty in the perceiver's processing exposure? *Personality and Social Psychology Review*, **8**, 364-382.
- 坂元 桂 (1996). 閾下・閾上単純接触効果と知覚的流暢性 日本心理学会第60回大会発表論文集, 675.
- 坂元 桂 (1999). 感情研究におけるサブリミナル効果 坂元 章・森津太子・坂元 桂・高比良美詠子 (編) サブリミナル効果の科学 無意識の世界では何が起きているか 学文社 pp.87-108.
- 坂元 桂・大須晶子・坂元 章 (1999). 呈示刺激の種類と単純接触効果 日本心理学会第63回大会発表論文集, 508.
- 佐藤 弥・青木知史・宮原道子 (1998). 単純呈示効果における刺激の好感度ベースライン効果の検証 日本心理学会第62回大会発表論文集, 602.
- 佐藤正恵・菅原由香 (2011). ADHD児の自己評価とその原因帰属の検討 アルテス リベラレス, **88**, 19-30.
- Seamon, J. G., Marsh, R. L., & Brody, N. (1984). Critical importance of exposure duration for affective discrimination of stimuli that are not recognized. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, **10**, 465-469.
- 富田瑛智・森川和則 (2011). 単純接触効果研究の動向と展望 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, **37**, 361-373.
- 上村郷志・新井田競・中村 元 (2011). 通信サービス利用時における繋がりにくさの原因帰属とメンタルモデルとの関係 日本認知科学会第28回大会発表論文集, 122-125.
- Vanderplas, J. M. & Garvin, E. A. (1959). The association value of random shapes. *Journal of Experimental Psychology*, **57**, 147-154.
- Winkielman, P. & Cacioppo, J. T. (2001). Mind at ease puts a smile on the face: Psychophysiological evidence that processing facilitation increases positive affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 989-1000.
- 八木善彦・菊地 正 (2009). 指示忘却による単純接触効果の減衰 筑波大学心理学研究, **37**, 9-17.
- Yoshimoto, S., Imai, H., & Takeuchi, T. (2012). Subliminal mere exposure effect and pupil responses. 基礎心理学研究, **31**, 75-76.
- Zajonc, R. B. (1968). Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology Monograph Supplement*, **9** (2, Pt. 2), 1-27.

Rethinking attributional processes in the perceptual fluency/ misattribution model of the mere exposure effect

Shinobu Ikoma

Mejiro University, Department of Psychological Counseling, Faculty of
Human Sciences, Part-time Lecturer

Mejiro Journal of Psychology, 2013 vol.9

[Abstract]

The mere exposure effect is a psychological phenomenon by which people develop positive preferences or impressions for stimuli because of mere exposure, i.e., seeing or hearing. The perceptual fluency/misattribution model is the strongest hypothesis which explains the effect. This paper argues and reviews the model and the (mis) attribution processes of it critically, especially focusing on the two points, the effect size of the subliminal mere exposure effect and the role of awareness for prior presentation. Directions for future research on the attribution processes are discussed.

keywords : mere exposure effect, perceptual fluency, implicit memory, attribution, unconscious processes